

この問題は事故もさることながら、責任のなすり合いでなかなか証明書を渡してもらえず、ついに事故発生から何十時間経ても埒があかず午前一時、会議室に行き列車の出発を申し出た。自分では朝五時からの作業指示や何から何までの指揮による心労、疲労は想像以上のものだった。

話は前後するが、昭和十六年六月十六日に内地では隣県新湊市の大火があったのを新聞で知った。私は五円を見舞金として送金しましたが、当時新聞紙上に報じられ感謝状が南苑の部隊まで届き、嬉しかったのも思い出の一つです。

また、人の運と不運は紙一重と申しますが、私ら同年兵で下士官勤務を果たし、先の部隊長が任官を指示して申し送ったのに、後任部隊長が身長の低さを理由に、ついに任官できぬまま八人は今日に至っております。

十八年二月二十七日除隊になり四月二十六日会社に復職、同年五月十日、私立青年学校指導員を命ぜられ、終戦までその任にあった。

終戦を迎え、十月十日ごろ連合軍マーケット少将より

小学校長あてに「国土復興のために早急に青年団を結成せよ」との通達があり、私に指名が回ってきました。

早速同年代の心当たりの方に呼び掛け、街の復興に関する初会合を開きました。最初に何から手を付けるか相談したところ、荒れ果てた小学校の修理を冬がくるまでにやろうということになり、直ちに作業を開始した。気がついた時、私は泣いていました。この時、日本の再起は意外に早いと確信、私はこの日を日本復興の日と決めております。昭和二十年十月二十日は日本再建を果たす記念すべき私の日です。

## 戦争体験記

埼玉県 守谷 昌平

昭和十六年徴兵検査により第二乙種合格となり、農業に従事しながら在郷軍人として郷土のために働いた。日中戦争はますます戦線が伸び、ついに大東亜戦争となった。

毎日毎日、新聞を見ながら戦火の広がりを固唾を呑んで見る日が続き、若くして父を亡くした思いと、五人の弟や妹たち、また母を養って食糧の増産に励む折り、何時も召集令状のことを思い、不安が重なる苦しい毎日でした。

昭和十九年三月十九日、「東部第八十三部隊二入隊スベシ」と、待つともなく待ったその日がきたのです。

村の大勢の方々の見送りを受け、「勝ってくるぞと勇ましく」と、軍歌を合唱して家を出る時のあの思いは、何にたとえたらよいのか分かりません。

親戚の人たちと家の前の坂道を下り、自動車の待つ向かいの道路へと行かねばなりません。

ふと、振り返って見ると、坂道の上に母がじいっと立って見送っているではありませんか。この母の姿は永遠に心から消えることはなく、今でも思い出さずにはいられません。今は亡き仏として、ひたすら線香をあげる自分です。

千葉県東部第八十三部隊へと本家の父と叔父に連れられて、柏駅より大勢の入隊者とともに衛門へと足を運ぶ

と、既に、憲兵や兵隊が見守る中、衛門の兵隊より訓示を受け、「第一番、守谷昌平」と呼ばれ、「はい」と返事をして、本家の父と叔父に別れを告げ、兵舎にかけよりました。これが兵隊の勤めとしての第一歩だったのです。

入隊して我が兵舎へ。中隊長ならびにお世話して下さいる古年兵、下士官、左右を見ても兵隊、兵隊で、心が定まらずにいると、伍長、軍曹、そして、一等兵以上の兵隊の皆さんより細かい班内のことを教えて頂き、星一つの軍服を着る身分となり、陸軍二等兵、守谷昌平として班内第一大隊重機関銃中隊西郡隊第三班員となった。

夜が明けて、三月二十日起床ラップとともに中隊ごとに宮庭で整列点呼を受け、宮城遥拝、君が代と、早朝の勤めを終え、楽しい朝食をすませ、予備演習となり、午後五時をもって一日の勤めを終え、それ以後は自由時間となり、戦友とともに語り合い、消灯までは楽しく過ごす。これが教育召集の兵隊の一日なのでした。

教育六か月の課程も終了し、我が家へ帰れる日も近いと、班内二十数人が嬉しく語り合っていた時、我々新兵

二等兵に普通召集に切り替えとの連隊本部から命令があり、心の乱れる時がまいりました。

そして幾日か過ぎ、故郷一泊休暇が認められ、喜び勇んで母の待つ我が家へと着き、その晩、話すことがたくさんありましたが、夜も明ければ兵舎へ戻らねばならない身であります。

時刻を見ながら千葉の兵舎へと急ぐその途中、初めての空襲警戒サイレンが鳴り響く中を兵舎へとひたすら進む電車も遅く、がまんできないほどでした。ついに灯火管制の最中、動揺しながらも宮門をくぐることができ、無事到着の報告をすまして、班内待機となり、六月二十二日、中華民国派遣歩兵補充兵として大陸行きを決定されました。

六月下旬、東武鉄道柏駅より大陸行きの列車に乗り、懐かしの故郷をあとにガタコンガタコンと急行が夜行となり、東京も過ぎ、大本営のある広島に差しかかろうとするその晩、周囲の兵隊も全員首を下げ、眠りにふけていった。

ふと目を開き「はあ」と我にかえったその時、目の前

の椅子の上に半身裸の姿で亡くなった父が立っているではありませんか。

「あれ」と思っただけ立ち上がった時、既に父の姿は消えていました。生命のある限り親の思いと自分の子を守る信念か、あるいは見送りの意思とも考え、忘れることのできないこの奇怪な現象を終生忘れられないこととして書き残しておきたいと思います。

夜は明けて、山口県下関港に到着、いよいよ乗船、朝鮮釜山港に向け出港。見送りの伍長、軍曹、兵隊に励まされ、別れを告げて、汽船南海丸に乗船することになりました。

大陸釜山に上陸するやいなや、軍属や兵隊の山で、通る道もないほどでした。しばらく待って貨車に乗せられ、朝鮮半島を縦断する。夜も昼も、万全の備えを行い、車中警備に余念のない日が幾日か続き、奉天、瀋陽を過ぎて山海関、濟南を過ぎ、南京到着、休養の後、揚子江を上り、兵陽方面で支那馬を受領して、雨の日、風の日、昼夜、原隊復帰のため進む。

病に倒れる友、打たれる騎馬、ときには敵の飛行機の

乱射を受け倒れる者数多く、正に戦場だと覚悟を新たに  
した。夜の洞庭湖も過ぎて長沙、桂林付近に到着。いよ  
いよ原隊中支派遣軍極部隊二九〇四部隊に追尾。機関銃  
中隊に配属されるにあたり、小生は中隊命令で第一小隊  
隊長伝令として勤務しなければならなくなりました。

我が部隊は中支から南支への進攻作戦に参加し、いつ  
も小隊長とともに助け合い、班長の命令とともに行動し  
なければならぬ身でありました。年も明けて二十年一  
月、山岳戦も口で表すことができないほど、大変な戦い  
でした。

いつも小隊長の下にいて、伝令の務めがあり、①に、  
B山に上り穴を掘って五人ぐらい入り、敵をねらい撃ち  
にするのです。そして急に方向転換する必要があること  
を知らされ、A山に伝令としてただ一人拳銃を手に、命  
令書をしかと握り、敵に隠れ、ようやくの思いで進みま  
す。②に小隊A隊に伝令、自分の使命の重大さに心をう  
たれ、「よかったなあ」と思うと、A隊小隊長より褒め  
られ、「帰りには敵に見つかるなよ、撃たれるなよ」と  
繰り返して、回り道を教えてくれたり、本当に心痛むこと

が度々あった。自分は何がなんでも一度は内地へ生還し  
て、二度三度とその時は、と考えたこともある。③に、  
これまた支那住民を助け兵隊の力になってもらうため、  
二人を連れて一緒に行動をともしましたが、ある晩、  
方向転換のため移動を始めた折り、二人に逃げられて一  
夜を明かすほど苦しみ探し求めたが、ついに現われず、  
隊長の許へ戻り、班長にも伝え、自分の過ちを報告いた  
しました。その時隊長は私に、一生懸命隊の任務を全う  
できたのだからもうよい、お前が無事で良かった良かっ  
たと言ひ、隊内の皆も喜んでくれました。この時の嬉し  
さは忘れられずに心に残っています。この上は隊長およ  
び兵士の皆のため、日本国のため、一層身を粉にしても  
尽くそうと決心しました。

月日とともに楽あり苦ありで話しようがありません。  
風土病ともいふべき怪奇熱病、マラリヤ病が発生し、  
兵隊が次々に倒れて病床に伏すこととなり、あるいは馬  
上に結び付けて行動しなければならぬのです。敵は眼  
前に控えているのですから、敵地を占領しようやく休  
む時に初めて、息のかすかな戦友に大声で呼び掛けなが

何人かは頭を持ち上げようとしながら、戦場の華と散っていきました。

これも日本国のためと、君が代と帝国万歳を祈って敬礼、葬られていきました。こうした方々も多く大陸に眠ることを思うと、心から安らかに眠れと、お祈りするばかりです。

昭和二十年五月、いよいよ南支方面進攻作戦となり、広東省九龍方面へ出撃の命令があった。我が中隊は朝食時にあたり、出発準備も加わり目の回るほど忙しくしている最中、大半の兵隊は朝食をすましかけている時、占年兵が「守谷、隊長に朝食を持って行ったか」といわれ、飯がまを覗いてみると、中身はなんと、回りについた飯粒だけではありませんか。それを飯盒の掛盒にかき集めて、ようやく平らにして「隊長殿、朝食であります」と差し出した時は無我夢中でした。

兵隊は軍装をして出発寸前だったので。隊長はただ一言「うん」といって蓋を開け、「守谷、食べていないんだらう、半分やるから飯盒もってこい」といわれ、涙もろとも飯盒を差し出しました。この思いはなんと言っ

て良いか、戦場で味わう隊長の思いやり、二度死しても忠義の鬼となり、身代わりとして尽くそうと考えました。

大部隊は進攻し、深い川の中、首まで浸かり、渡って、また、馬も兵士に連れられ、奥へ奥へと進む。戦闘はますます激しくなり、空には敵の飛行機が数機、爆弾投下や機銃で地上の兵士に撃ちかかります。これまた、なんといえよいか分らないほどです。

六月も中ごろだと思えますが、南支新豊で重大な一戦に自分も隊長を守り、班長とともに真っ先に突進を始めたその時、右上の高い山に敵が潜んでおり、機銃でパンパンと続いたかと思うと、自分の前に着弾、砂煙が上がって「おやこれは」と思ったとたん、背中の中心から右足に杵で殴られたようなドカンというすごい衝撃。背のうを背負ったままバツタリと倒れたが、自分は意識はしっかりしているし、頭もなんともないし、大丈夫だ、大丈夫だといっていた。するとすぐに班長や隊長まで駆けつけてきて、前の「クリーク池」に入れて、衛生兵の一人が駆けつけ、皆で手当を下さいました。クリーク池には水がなく、本当に良かったと思った時、車中で拝ん

だ亡き父を思い、助けてくれたのだなあと気付き、忘れることのできない思い出です。

ついに腰部貫通銃創として野戦病院に入院し、毎日担架に乗せて治療を続けてくれました。その甲斐があつて傷もきれいになり、しびれもとれて原隊へ復帰も近く、歩行訓練をすることになりましたが、やはり帯剣は帯状には装着できず、首から肩にかけて歩かねばなりませんでした。

一か月余りの病院生活も過ぎるころ、「本部二九〇四部隊は全員北上せよ」と命令があつたとの噂が広がり、ついに支那住民が「カッポンワンラ（戦争が終わつたの意）、カッポンワンラ」と言つて我らに近寄るようになり、初めて大東亜戦争終結だと感じ、皆が勝つた、勝つたと大喜びでした。

我々兵隊は南昌へ向かつて北上を続け、毎日毎日が忙しく、露営も楽しく終わりました。南昌着と同時に在住の日本人たち、また国防婦人会のタスキをした女の人たちの慰問団が道脇に並び、軍歌を演奏して迎えてくれ、胸がいっぱいでした。

これより兵営内では、軍旗や軍隊手帳、その他菊の御紋章等、残らず焼き捨て、武装解除への道を進まねばなりませんでした。

我々兵隊は上海に近い無錫の兵営に着くことになり、ここでしばらく休養して、上海から徐州の鉄道警備に働かされました。その後、我々本隊は上海に向かい、集営と一か所に集まり、復員の準備に、事務日に夜忙しく手伝わされました。

自分の隊長も今は二中隊に籍をおき、たびたび会う時があり、「やあ、守谷か」と言われ、敬礼を交わしました。自分も本部の将校当番として事務所勤務で毎日忙しく動き回りました。

武装解除も事なくすみ、兵隊も破れた軍服や裂けた軍靴、ゲートル等一切を返上し、新品と着替え、復員を待つばかりとなりました。

年も明けて昭和二十一年三月一日、母国帰還復員の通達があり、上海広場へ集合し、皆元気に足取りも軽く、身体検査も異常なくすみ、中国の兵隊さんに送られて港へ急いだ。

これぞ「昨日の敵は今日の友」といったことが、つくづく実感されました。

港にはリバイ船が横付けされていて、我らを迎えてくれました。さあ乗船だと、次々に胸を膨らませて棧橋を渡って乗り込むこの気持は、生れて初めての喜びです。

空は晴れて、我らの進む東の空も日本晴だ。船は静かに動き出し、大隊長が階級章をはずせとの命令を出し、一人の兵隊として階級章をみな海の中に捨てました。初めてすべてが日本国民の一人に戻って「だれそれさん」と呼び合い、隣の人も前の人も、どこを見てもみな日本人だ、軍隊はなくなった、だれの顔も明るく、故郷への思いでいっぱいです。

船の中では、広島、長崎の原爆の話も聞かされ、自分が帰る家はあるだろうか、どうしようかなど語り合いつつ、船は九州五島列島を過ぎ、博多港へと波を立てて全速力で進んで行きました。

おわりに

富士は天高くそびえたち、昭和天皇崩御、昭和も去り、年号も新たに平成と名付けられました。

年老いた妻、子とともに六十八歳、終戦後、夢と去った四十幾年が過ぎた今日、亡き友を弔って思い出深い回顧を今、ここに綴る。

## 激動の時代・追憶あれこれ

山口県 市川 勇

昭和十二年六月二十九日陸軍士官学校卒業直後、支那事変勃発、二十一歳、早くも応急動員部隊野砲第五聯隊小隊長として八月三日宇品港出発、見習士官のまま戦火の第一線である北支戦線へ駆けつけた。

まず秦の始皇帝の夢を秘め、長年月の歴史とともに風化してはいるが、近代戦にもけっこう防側側にとっては威力を発揮した万里の長城戦の突破攻撃に参加して、現在では考えることすらできない大きな輓馬六頭立ての軍馬とともに、一〇センチ榴弾砲の威力を遺憾なく発揮しつつ、戦史上に輝く激戦地忻口鎮から山西省大原の攻略戦にと進撃を続けた。